

宿屋左衛門光則への御状

文永五年一〇月一日 四七歳

先年<sup>かんが</sup>勘へたるの書立正安国論<sup>ふごう</sup>に普合せるに就いて、言上せしめ候<sup>おわ</sup>ひ畢んぬ。

抑<sup>そもそも</sup>正月十八日、西戎大蒙古<sup>せいじゅう</sup>の牒状<sup>ちょうじょう</sup>到来すと。之を以て之を案<sup>あん</sup>ずるに、日蓮は聖人の一分に当たり候か。然りと雖も未だ御尋ねに預<sup>あず</sup>からず候の間、重ねて諫状<sup>かんじょう</sup>を捧ぐ。

希<sup>こいねが</sup>はくは御帰依の寺僧を停止せられ、宜<sup>よろ</sup>しく法華経に帰せしむべし。若し然らずんば後悔何ぞ追はんと。此の趣を以て十一箇所に申さしめ候なり。定んで御評議有るべく候か。偏に貴殿を仰ぎ奉る。早く日蓮が本望を遂げしめ給へ。十箇所は平左衛門尉<sup>へいのさえもんのじょう</sup>殿に申さしむる所なり。委悉<sup>いしつ</sup>に申し度く候と雖も、上書分明なるの間省略せしめ候<sup>みけしき</sup>。御気色を以て御披露<sup>ごひろうしょき</sup>庶幾せしむる所に候。恐々謹言。

文永五年<sup>戊辰</sup>十月十一日

日蓮花押

謹上 宿屋入道殿